

城山三郎

賢人たちの世

文藝春秋

城山三郎

人たちの世

文藝春秋

けんじん
賢人たちの世^よ

1990年11月20日第1刷

(定価はカバーに表示してあります)

著 者 城山三郎

発 行 者 豊田健次

発 行 所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23

電話 東京03 (265) 1211 (代)

印 刷 凸版印刷

製 本 加藤製本

©Saburo Shiroyama 1990 Printed in Japan
ISBN4-16-312160-9

賢人たちの世／目次

はじめに

一、吉小路の人々

二、暗闇の牛

三、瀬戸の花嫁

四、それぞれの春

五、「算盤が立ちすぎる」

六、「晴雨同舟」

七、それぞれの秋

あとがき

A 装
D 画
·
坂 加
田 藤
政 一
则

賢人たちの世

はじめに

平成となった年のはじめ、閣僚の一人であった旧知のA氏から電話があった。

官房長官からの依頼をとりつぐのだが、賢人会議のメンバーになってくれ、と。正式の名称は何とのか、政治改革についての総理の諮問機関のことである。

「柄^{がら}にもないこと」と、わたしは言下にお断わりした。

数日おいて、政界実力者のB氏から電話。同じ用件であり、わたしの返事も変わらなかった。さらに官房長官本人から。朴訥な口調でねばられた。

やむなく一晩考えるという形をとり、次の朝、断わりの電話を入れた。

だが、官房長官は「三拝九拝しても、おねがいしたい」と言う。口先だけのことと思わせぬものがあつた。

わたしはふり切って受話器を置いたのだが、そのあと不安になった。

はるばる家にまで押しかけられ、「三拝九拝」はともかく、膝詰めで迫られたら、どうしよう。気の弱いわたしは、ついうなずいてしまうかも知れない。これはたいへん、と思った。

「二、三日家を空けよう。箱根へ行く」

かげんな顔をする家人をせき立てた。

箱根までは車で一時間。気に入りの古いホテルがあり、そこで湯に浸り、湖を見下し、空を眺めた。富士がとくに白く冴えて見えた。

ぼっかりと突然の休日。わるい気分ではなかった。

ただ「賢人」なるものに逐われて出てきただけに、賢人とは何かをつい考えた。その日も、次の日も。もつとも「竹林の七賢人」にまでさかのぼるほどのことではなく、日本での近來の用例をあれこれ思い出した。

吉田茂は大磯の宏大な屋敷の庭に、彼の信奉する五人の政治家、岩倉具視、木戸孝允、大久保利通、三条実美、伊藤博文の像を祀る堂を建て、五賢堂と名づけた。後に西園寺公望が加えられ、さらに吉田の死後、佐藤栄作たちによって吉田自身を加えられ、七賢堂となった。

その七人、日本の政治にとって重きをなしたことはわかるが、「竹林の七賢人」にあやかっただけで賢人といえるかどうか。どこが「賢」なのか、その「賢」とは何を意味するのか、疑問は残るが、もともと吉田や佐藤の好みによるものであり、うんぬんしてもはじまらない。

次に、「日米賢人会議」「日仏賢人会議」などという用例があるが、これらは英語なり仏語を直訳しただけであり、自ら「賢人」を名乗る無邪気さを恥じている人もあるであろう。

そこで残るのは、昭和四十年代から五十年代半ばまで続いた「政界の三賢人」、椎名悦三郎、前尾繁三郎、灘尾弘吉のことである。

三人の中、唯一人いまでも健在の灘尾は、

「誰が言い出したものかね。賢人じゃなく変人だろうと、こっちは言ったんだが」

とのことだが、変人どころか、三人とも主要閣僚や自民党三役を歴任し、二人は衆議院議長を

つとめ、一人は副総裁の身で総理を選任するという大役を果たした。つまり、総理をつくる男となつた。

その意味では、ときに日本の政治動向を左右する力もある三人であつた。また、党の危機の際など、次期総裁として三人の名が交々^{こもも}出た。

「賢人」と呼ぶ裏で、敬遠し、あるいは煙たがる向きもあつたであらうが、ともかく政界では気になる三人であり、まぎれもない存在感のある三人であつた。

逆にいえば、賢なる者は無力で愚者のみ逞しいという世ばかりでなく、曲りなりにも賢人が賢人として遇された世が戦後にもあつたわけで、それを思うと、ほろにがい懐しさだけでなく、失われたものへの渇きが強まってくる。もちろんそこには、いまの世の姿への焦立ち^{いらだち}あつてのことでもあるが。

それにしても、彼等三人はなぜ世に力を持ち得たのか、その賢人の実体とは何であつたのか。わたしはわたしなりに追ってみようと思つた。

一、吉小路の人々

総理官邸からの電話は、

「外務大臣への就任をおねがいしたい」というものであった。

電話を受けた椎名悦三郎、六十六歳。

すでに官房長官、通産大臣を経験しているが、外務大臣になれば、さらに幅がひろがり、大きな箔がつく。願ってもない話のはずなのに、椎名は顔をくもらせた。相手にもう一度念を押してから、

「それは、ぼくには難しい」

先方にたたみかけられても、首を振るばかり。そのあげく、

「考えろといわれれば考えるが、難しいね」

怒ったような声で言い、椎名は電話を切った。

「外務だなんて」

一言言っただけ、黙りこむ。

秘書たちが色めき立ち、

「それで先生は……」

椎名は吐きすてるように、

「ふざけちゃいけない。通産ならわかるが、外務なんてできるわけねえじゃねえか。断わる」

すぐにも断わりの電話をかけそうな見幕であった。秘書の岩瀬繁があわてて、

「外務といっても、これからは経済外交の時代です。十分こなせるお仕事です……」

それを皮切りに、まわりが声を励まして説得する。

椎名はいつものことだが、聞いているのかいなのかわからぬ感じで、ときどき、「ふん」「ふん」と氣のない返事をはさむばかり。その上で、また腹立たしそうに言った。

「いったい、だれがこんな人事を考えやがったんだ」

昭和三十九年七月、第三次池田内閣での内閣改造がはじまったときのことである。

椎名という人間を調べて、わたしなりにこのときの椎名の心中を察すると、役目がこなせるかどうかという問題だけでなく、性に合わぬ仕事という感じが、まず働いたのではないか。

官僚出身、それも次官まで昇りつめた身であるにかかわらずというか、逆にそのことに飽きたためというか、政治家になってからの椎名は官僚的なものを敬遠した。

政治家仲間でも、どちらかといえば官僚出身者よりも政党人と親しく、党人政治家を買う傾向があった。

外務といえ、大蔵と並んで官僚中の官僚の拠点である。建前や儀礼的なものに縛られることも多い。

「英語がしゃべれて、アメリカなど行って、おべんちゃらばかり言って」

このときのことではないが、外務大臣というものについて椎名がこんな風につぶやくのを聞いたひとが居る。

後年、椎名の息子の素夫も、たまたまバリーで公式外遊途上の父親に会ったとき、いきなりぼやかれたことをおぼえている。

「昼は何だ、夜はタキシードだと、まるで着せ替え人形だ」
おれには似合わぬ、やり切れぬ、と言わんばかりであった。

もともと椎名には物臭な一面があった。

官僚になって二年目、愛知県の商工課長に出されたときのことである。椎名は毎日机の上に積み上げられる書類の山にうんざりし、中央へ出す書類以外は、給仕にハンコを捺させることにした。

すでに他の人たちが目を通し、また、きまりきった決裁も多い。それに庁内の書類は知事どまりであり、仮にまちがいがあっても、自分が責任をとれば手直しがきく——という判断からであった。

小学校を出たばかりの給仕が、課長決裁の書類にかたっぱしから元気よくハンコを捺しまくり、庁内は大きわざとなった。

「皆が本気で起案しなくなるから」と、上司たちに言われ、結局、五日ほどでやめたのだが、それから後も、自分でハンコを捺しはするものの、うわのそら。「節穴哲学」と称し、天井の節穴を眺めながら捺す、という有様であった。

物臭ぶりは政治家になってからも続いた。

椎名ははじめ岸派に属し、同派の分裂後、川島正次郎らと組んだが、その派の川島、赤城宗徳といった幹部がカネづくりをにが手とするため、商工省時代の顔のある椎名が、資金集めに動き廻った。

だが、そうして集めたカネを椎名は自分で配ることはせず、世話役に任せて渡してもらった。

「なんで椎名からもらわないんだ。椎名が自分で配ればいいのに」

という声に対しては、ただ一言。

「そんな面倒くさいこと」

椎名は後に『葉根譚』の中に、

「不如省事（事を省くにしかず）」

という言葉を見つけ、〈思わずひぎをたたいた〉（『私の履歴書』）

それは、物臭を正当化するには恰好の言葉であり、以後、「省事」をその座右銘とし、色紙にも多くはこの二文字を書いた。

〈何事によらず物进行处理する時は、ささいで繁雑なことは切り捨て、主要な部分を簡単明快にかむのがよい。本質でない小さなものに心を奪われると、目がくらんで大切なものをのがしてしまふ。これぞ「省事」の精神である〉

というわけである。

物臭にせよ、省事にせよ、いずれにしても外務大臣の仕事には不向き。

自らを知る椎名にしてみれば、「できるわけねえじゃねえか」としか答えようがなかったであろう。

この人事について、椎名は「仰天した」と書き残している。

へこのときは、事前に私の入閣がおつてきたから「また通産だろう。こんどは前回よりも少しはものもわかつてきたし、知人もいるし、まあ何とかなるだろう」と、例によつての怠け者らしい考え方でタカをくくつていたところゝだったからである。

一向に腰を上げようとしないうちに椎名に、組閣本部から催促の電話がかかった。

椎名は川島副総裁を呼び出してもらい、

「冗談もほどほどに」

と言つた。川島なら椎名を理解してくれていると思つたのだが、その川島が意外にも、

「いや、オレも適任だと思つてるんだからダメだ」

それならとにかく組閣本部へ行き、池田に会つて断わる他ないと、出かけたところ、池田はとり合はず、

「おれも手伝うから一緒にやろうや」

と、ただくり返す。すでにお膳立てはすっかりでき上つてゐる様子で、これ以上逆らえば世間をさがわがせ、面倒なことにもなる。

椎名はついに観念した。

「新外相に椎名」と聞いて、外務省も仰天したが、翌日になると、その外務省をさらにおどろかせる事態が起った。

通産次官が訪ねてきて、

「腰の重い方だから、外交儀礼に反するようなことのないよう、くれぐれもよろしく」

と、外務次官はじめ全局長、それに秘書官にまで頭を下げて廻ったからである。

『記録椎名悦三郎』は記す。

へこれは通産省においてどれくらい椎名の声望が高いかということ、また通産官僚の先輩に対する配慮の深さを物語っていた。それとともに次官ら通産省首脳が椎名の外相就任にかなりの不安をもっていることをもあらわしていた。あまり例のない挨拶をうけた外務省首脳たちは、正直いって「ズブの素人」外相への懸念もさることながら、それよりは官僚社会の仁義からしても、椎名外相を省をあげて補佐しなければ——という気持ちにさせるゝことになった、と。

外相に就任した椎名は、省内幹部を集めて、

「きみたちにすべて任せる。好きなようにやってくれ。責任はすべて自分がとるから」

と挨拶した。恰好をつけて見せるというのではなく、椎名の本心であった。それに力点は最後の一言に在った。

初の記者会見で抱負など訊かれた時も、椎名は、

「はじめてで、わかりません」

と率直に答えた。このため、「心細い限りの素人外相」などとマスコミに叩かれた。

それから四カ月経たぬ中に、「手伝うから一緒にやろうや」と言ってくれていた池田首相が、

病氣のため引退し、佐藤栄作政権が誕生、椎名は閣僚の多くとともに留任となった。

年末には国連総会のため、ニューヨークへ。そこでラスク米國務長官と会った。

第一回会談のあとの記者会見では、椎名は自分から話そうとはせず、「どうでした」と記者団に促されて、

「まあ、あんなものだな」

追及されても、

「あんなものとはあんなものさ」

第二回会談は予定時間をオーバーする長いものになり、記者団は今度こそはと色めき立ったが、椎名は、

「実はラスクに説教してたんだ」

戦前、椎名は商工省から派遣され、満洲国の経営に携わっていたことがある。

まだ匪賊が出没し、民衆が匪賊に通じているため関東軍は掃討に手こずっていた。問題は民生に在り、民衆の心に在った。

このときの経験からいって、ベトナム平定のためには「政七兵三」、つまり軍事力は三分にとどめるべきだと、ラスクを説いたというのである。

ベトナム戦争への支援を求めるラスクをそうした形でかわしたのだが、椎名はそこまでは触れなかった。

説教がラスクに通じたかと記者団に訊かれた椎名は、

「さあ、どこまでわかったかな」